白銀の生き様

琉叶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
白銀の生き様

【Ｎコード】
Ｎ３８３９Ｙ

【作者名】
琉叶

【あらすじ】
坂田銀時という名の一人の男。
この男が生きるは修羅の道。
ひょんなことからそんな坂田銀時の記憶世界に入り込んでしまう神楽・新八・近藤・土方・沖田・山崎。
今までの銀時の全てを知ってしまう。
さらにこの世界では思考や感情まで共有してしまって・・・
攘夷戦争が終わってこの話の始めに戻るまでの話も組み入れていきます。

銀ちゃん記憶喪失編とか紅桜編とか新撰組動乱編等々・・・

プロローグ的なあれのつもりだけど多分分からないと思う・・・（前書き）

銀魂が好きでで好きで好きで！
特に銀時様はもうすばらしすぎる！

てなことで、銀時様の話しを書きたいな～てことで書き始めちゃいました小説！
駄文で大変読みにくいとは思いますが、これからよろしくお願いします←

最低でも一ヶ月中には必ず登校しようと思います。
っあ、違った、投稿したいと思います。

プロローグ的なあれのつもりだけど多分分からないと思う・・・

プロローグ的なあれのつもりだけど多分分からないと思う・・・

歌舞伎町のある一角で、大きな声を張り上げベルを鳴らしている男がいた。

チリ~ンチリ~ン

「出ました特賞！特賞はなんと、温泉旅行無料券！」

そのくじ引きで特賞を引いたであろう赤い中華服に身を包んだ少女は言った。

「マジでか！？」

そして続く男の声にさらにテンションを上げる。

「オマケで酢昆布百枚贈呈～」

その一言を聞き絶えず上下する赤い服。

よほど嬉しかったのだろう、「キャッホーイ！」とよく意味が解らない喜び方をしている。

しばらくして落ち着いたのか、その少女は温泉旅行のチケットと大量の酢昆布を受け取り、ダッシュでその場を去って行った。

そして後に残されたのは、大量の砂埃とそのあまりの勢いに驚いている男だった。

☆万事屋

バタンッ

大きな音と共に開けはなれた扉。

ドタドタドタ

扉が開いたと思いきや廊下に鳴り響く足音。
その足音に向かって、ここの家の主である銀時は声をかける。

「おーいうるせーぞ。銀さん今起きたばかりなの、だからもうちょい静かにしろー」

そう言いながらパジャマ姿で居間に出てくる。

「そんな事言っていられるのも今のうちネ！」

いつものごとく昼過ぎに起きた銀時に言い返すのは、この万事屋銀ちゃんで働いている従業員の一人神楽である。
銀時はそんな神楽の言葉に質問を投げかける。

「今のうちってどういう事だ？」

その質問を待ってましたとばかりに神楽は腕を掲げる。
そして、神楽が掲げた腕の先には・・・

「温泉旅行無料券四名様行きのチケットね！さっき商店街のくじ引きで当てたネ！」

そのチケットを見た瞬間銀時の態度は一変した。

「「温泉―！？」」

いつの間にか万事屋に来ていた新八の声とダブル銀時。そして神楽に

「よくやった神楽！銀さんお前はやれば出来る子だって信じてたぞ！」

などという事を言った。

そして新八も、神楽にお褒めの言葉をかける。

「すごいよ神楽ちゃん！今すぐ行きましょうよ。姉上も誘って四人で！」

そんな二人の喜びようは正直引くほどすごかった。

だが、二人の言葉に調子をよくした神楽はこんな事を言う。

「全部私のお蔭ネ！だからこれからは私の事を歌舞伎町の女王兼、工場長と呼ぶヨロシ！やっぱりお前等には私が付いてないとダメアルな」

腕を自分の胸の辺りで組みながら首を縦に振っては「うんうん」という神楽。

だがそんな神楽の言葉を聞いている者はこの場に誰一人として存在していない。

「うし、今すぐ行くぞ新八。旅行の用意しろ、用意！後おやつは三百円までな！」

「銀さん、温泉は遠足じゃありませんよ、まぁそれは良いとして。僕一旦旅行の用意をしに家に戻りますね。姉上にも温泉の事伝えておきます！」

「おう！早くしないとおいてくぞー」

そんなやり取りを神楽は目を見開きながら見ている。体が小刻みに揺れている。

そして、軽く無視をされる形をとってしまった神楽はその場でキレる。

「人の話はちゃんと聞くネ！」

結局、この日は温泉に行く事は出来なかった。え、何故嘗て？それは当然・・・

「大体いつも銀ちゃんは・・・・・」

とまぁ、こういった具合に、この日は永遠と神楽に説教、というか文句？いやいや、愚痴を、そう！愚痴を言われていたという訳です。

オマケ？

妙「温泉に行けるなんてホント久し振り。前に行ったのは何時だったかしら？」

銀「・・・・・・・（ブルブルブル）」

神「？銀ちゃんなんで震えてるアルか？」

新「きっと前温泉に行った時の事を思い出してるんだよ。ほら、幽・

・・・」

銀「幽霊じゃねー、スタンドだっ！」

プロローグ的なあれのつもりだけど多分分からないと思う・・・（後書き）

「銀ちゃん銀ちゃん！」
「なんだ？」
「これ書いてる作者、受験生だってのに毎日毎日八時間以上アニメみて本見て、睡眠時間二時間ほどで、大丈夫アルか？」
「いや、無理だろ」
「ですねｗって・・・笑い事じゃねぇーだろぉぉぉぉぉ！！」

良い事の後には必ずと言っていいほど悪い事が待っている（前書き）

なんか前の読んで思ったけど・・・

私ニートじゃないよ！？

投稿って漢字打ち間違えちゃっただけなのになんと見事なニート発言・・・

って思わず感心しちゃったよ！

あぁ、この前放送してた銀魂のデスキャンサー編の見事なまでの勘違い文、銀時様凄過ぎますよ・・・

良い事の後には必ずと言っていいほど悪い事が待っている

白く立ち上る湯煙。ここは温泉。

その見るからに温かそうな温泉に、肩までしっかり浸かって体を温めているのは、銀時と本体を脱衣所に置いてきた眼鏡掛け機（新八）。

「・・・・・」

少しの間だけ静寂がその場を支配する。

そして！

「ちょっと待てー！何で僕の眼鏡が本体で僕がただの眼鏡掛け機なんですか！・・・誰だか知らないけど、いい加減なことは言わずにちゃんとナレーションしてくださいよ！」

盛大なツッコミを入れるメガネ（新八）。何処とも付かない方向を向き、声を張り上げている。

「周りの人に迷惑がかかると言うことが分からないのだろうか」と、疑問を抱いてしまう。

ちなみに・・・

「今ナレーションをしているのはこの銀魂の主人公であるこの私、坂田銀・・・いでっ！」

銀時の自己紹介を見事にぶち壊す新八。

「お前かいいいいい！」

大きく頭をぶたれた銀時は新八を見て言う。

「痛ってーなぁ。何すんだよぱっつぁん。暴力はいけませんってお前習わなかったのか？」

「何ってお前が何しとんじゃいー」

その新八のツッコミに頭をさすりながらも、何事もなかったかのように返す銀時。

「何ってあれだよ？ほら、自己紹介、てか他人紹介的な？」

そう言いながら人差指を体の前で立てる。

ボキッ！

銀時の人差し指がそんな効果音を上げる。

「・・・・・痛ってぇー！」

数秒後銀時は悲鳴を上げた。

傍(はた)からそんな銀時の様子を見ていれば、先ほどの地味な攻撃がいかに痛かったかが分かる。

銀時の指を再起不能にした後、新八は静かに言う。

「いい加減にしてください」

それを聞いた銀時は、やや涙目になっているその目を新八に向け、大きな声でその言葉をシャウトした。

「いい加減にするのはオメェーだよ！たく、どうすんのこれどうすんの？銀さんの指があらぬ方向向いちゃってるよ？もう逝っちゃってるよこの子！もう生死の境目ウロウロしちゃってるよ！」

そんな銀時の言葉を軽く受け流す新八。

だが、聞き流しながらゆっくり目を開いた新八の目の先に映っていたのは、新八達の良く知る人物の後姿だった。

その人物の取ろうとしている行動を推理した新八は、固まってしまう。

その様子を見て不審に思った銀時は、新八と同じ方向を見てみる。

そして、新はちがなぜ固まってしまっていたのかを理解する。

だがそれを信じたくない銀時は、軽く新八にボケながら問う。

「新八君、ここってあれ？動物と一緒に入れる温泉とかだっけ？」

そんな銀時の言葉を軽く否定する新八。

「いえ、ここは人間専用の筈ですよ、銀さん」

そんな事を言っている二人の視線の先にいたのは、たった今！女湯を覗こうとしているゴリラこと新選組局長、近藤勲だった。

銀時と新八にその姿を見られていることに全く気づいていない近藤。

「お妙さん待っててください！この近藤勲、いつ何時(なんどき)どこであろうと、お妙さんを警・・」

「警護」と言いかけていた近藤だったが、空から降ってきた巨大な岩によってその言葉は遮られてしまった。

バッシャーン！

大きな音と共に水飛沫を上げる温泉。

そして、その飛沫が上がったところに目を向けると、たった今岩によって押しつぶされた近藤が、湯に浮かんでいた。

「「・・・・・・」」

そんな光景をずっと遠目で傍観していた銀時たち。

「銀さん。どうしましょう」

新八に言われた銀時は、頭をかきながら仕方なしに大声を上げた。

「大串君いる～？お宅の局長さんストーカー行為オマケに除き行為を働いてそこで伸びちゃってるよ～」

そこまで言い終えた銀時に、岩陰に隠れてその姿が見えなかった人物から素早くツッコミが入る。

「誰が大串だー！」

ツッコミを入れたのは皆さんお馴染み新選組副長、土方十四朗。そしてその後から続いて出てきたのは同じく新選組、一番隊隊長沖田総悟。

「旦那、ここ出会うなんて奇遇ですねィ？」

「あれ？万屋の旦那。旦那もこの温泉旅館に来てたんですか？」

さらにその沖田の後ろから出てきたのは、これまた新選組の隊員山崎退だった。

「そう、皆さんジミーとしてお馴染みの山崎である。」

またしても勝手なナレーションを入れる銀時。

「ちょ、旦那！何勝手に変なナレーションしてんですか！？それとジミーって何！？それはやっぱり地味から来てるのかぁ！？」

そんな銀時の勝手なナレーションにツッコミを入れる山崎。

その山崎のツッコミに対しての銀時の受け答えは

「イエス！ジャスドゥーイットゥ！」

「いや意味わかんないからそれ！」

突っ込みの連続で疲れたのか、山崎は肩を上下させながら息をする。

そんな山崎の事を軽くスルーし、土方・沖田に喧嘩を売るような言葉を投げかける銀時。

「それにしてもなんでこんなところに新選組がいんだよ。チンピラ

警察二十四時ですかコノヤロー。仕事はどうした？」

それでも、どうでもよさそうな態度で言う。

「あぁ、近藤さんが昨日いきなり新撰組慰安旅行に行かないかって言ってきてな。他の奴等は全員都合が付かなかったが、近藤さんからのせっかくの誘いだ、断るわけにも行かねぇ」

鼻をほじくりながらやっぱりどうでもいいやという態度をとる銀時。

万事屋一行と新選組一行は、それからしばらくの間は静かに温泉に浸かっていた。

近藤も時間がたって意識を取り戻し、今度は大人しく温泉に浸かっている。

後で聞いた話だが、ゴリラストーカーはなんでも、お妙が温泉旅行に行くと聞いて付いてきたそうだ。

土方達にとっては、甚だ迷惑な話だ。

しばらくの間は皆、静かに温泉に浸かっていた。

だがいつの間にか銀時の姿がこの場からなくなっている事に気づいた近藤が、新八に声をかける。

「新八君、万事屋はどうした、もう出たのか？」

その質問に「あぁその事なら」と言うように答える新八。

「銀さんなら露天風呂の方に行きましたよ。
あと、温まったら適当に出るとも言ってましたよ。
随分前にここから出ていったのでもう温泉から出てるかもしれませんね」

近藤と新八が銀時のことについて話ている事に気づいた土方は、
ふらっとその会話に参加してきた。

「万事屋がどうかしたのか」

「いや、万事屋が露天風呂に浸かりに行ったと言うような事を話していたんだ。さっきから姿が見えないようだからどうしたものかと思えば、そういう事らしい」

そんな近藤の言葉にいち早く言葉を返したのは沖田だった。

「旦那一人で露天風呂独占なんてスミにおけねーですぜぃ。近藤さん俺達もその露天風呂行ってみやしょーぜぃ」

沖田の提案に乗る近藤。

「それもそうだな、総悟の言うとおりだ。温泉は一人ではいるより大勢で入った方が楽しいからな」

そう言いながら新撰組＋新八は、銀時が先に浸かりに行った露天風呂に行った。

山崎は一人置いて行かれそうになったが、その事実に気づいた山崎は慌てて皆の後を追った。

良い事の後には必ずと言っていいほど悪い事が待っている（後書き）

「なんか俺、前書きの部分ですごいって褒められてんだけど。これって良い事だよね？」
「とらえようによっちゃぁそうですね」
「確かにあれは放送コードぎりぎりだったアルナ！」
「え？何が？銀さんなんかテレビで危ない事した？」
「はい。あれは見事なまでの卑猥メールになってましたよ。銀さん携帯の使い方には気をつけてくださいね＾＾」
「神楽ちゃん？何か新八君の後ろに黒いオーラみたいなのが見えるんだけど・・・気のせいだよね？」
「さぁ？」

「・・・・（ダラダラダラ）」

噂によるとこの後しばらくの間は携帯も見たくないっと銀時様は言い張っていたそうです。

人の過去は開いてみればパンドラの箱って事があるから気をつけろ！（前書き）

何個かストックしてあるため早く感想が見たくて、てか聞きたく今日の今日でまた投稿しちゃいました・・・

これじゃぁストックがあっという間になくなるよ（涙）

人の過去は開いてみればパンドラの箱って事があるから気をつけろ！

☆【巻き戻りの湯】（露天風呂）

さっきいた温泉とは違う効能を持った別の温泉（露天風呂）に場所は変わる。

「万事屋のヤローはいねぇーみたいだな」

そう言いながら辺りを見渡す土方。

「もう出てしまったんだろう」

近藤も土方と同じように辺りを見渡しながら言う。やはり銀時の姿はここにはない。

近藤の言うとおりもう温泉から出てしまったんだろう。

新八も土方・近藤と同じように銀時を探すため辺りを見渡していたが、銀時の姿はどこにも見当たらない。

（もう出てしまったんだな）と新八は考えた。

だがふと、ある異変に気がつく。

「あれ？なんだかこの温泉、湯煙がやけに多すぎません？・・・・ていうか、どんどん辺りが見えなくなっていってるんですけど！？」

新八がそう言う間も、どんどん湯煙は立ち込めていく。もうじき前が真っ白になって見えなくなりそうだ。

「何だか知らねーがこれはやばいぜ。皆早くこの湯から出ろ！」

土方がそう言ったものの、少しだけ言うのが遅くれた、なぜならすでに、あたりは白いモヤで覆われていたからだ。

☆？？？？？

しばらくの間、その場の様子を見るため、誰一人としてそこを動こうとしなかった。

ほんの数分後、白いモヤ綺麗さっぱりなくなった。

その代わり、目の前に広がっていた光景は、先ほどいた場所（温

泉）とは全く違ったものだった。

村を行きかう人々。その中を行きかう男達の腰には刀。村は静かだが、確かな賑わいを見せている。

「ここは・・・」

間抜けな声を上げた新八のあとに続いて口を開く近藤。

「どうなってんだこりゃー？何で俺達はこんな所にいるんだ。トシ、説明してくれ」

その無茶振りに、静かにツッコミを入れる土方。

「俺に聞かないでくれ近藤さん」

「確か俺達は温泉にいた筈ですよねィ？」

沖田が「おっかしーな」という表情をしながら言う。

「確かに温泉にいた筈なのになんで！？てかなんで俺達服着てるんですか？」

混乱する新八・近藤・土方・沖田・山崎。

だがそれは当然の事である。理由は簡単、いきなり知らないところに移動した上に、温泉にいたはずなのに服までなぜかきちんと着こんでていたからである。

そんな彼らの混乱を不思議に思った少女の影。

「うるさいネ！お前らはあれですか？ちゃんとロボットの説明を見ないで遊んで壊してオロオロしちゃってる可哀そうな子供ですか？」

そう、神楽だ。意味のよく分からない例えをする神楽に対し、混乱する頭で質問をする新八。

「か、神楽ちゃん！何でここに？ていうか意味解んないよ今の例え・・・」

それを聞き不思議そうな顔をする神楽。

「お前ら本当に【巻き戻りの湯】の効能見なかったアルか？」

その一言を聞きいた瞬間、そこにいた神楽以外の全員が口を「は」

の字にさせた。

それを見た神楽は「全く仕方ない奴等ネ・・・」と、ため息混じりにその【巻き戻りの湯】とやらの効能を教えた。

神楽の話は要領を得ないが、その話を理解しようと皆が神楽の話に聞き入った。

説明終了

「つまり、その【巻き戻りの湯】って温泉に入ったら、一度目に入った人の記憶を吸収して、二度目に入った人達にその温泉に吸収された記憶を見せる効能があると・・・そういう事？」

神楽は「そうネ！」と言いながらさらに付け加えを入れた。

「もっと言わせれば一度目に入る奴、つまり記憶を吸収される奴は一人で入った奴限定。そいつの記憶を見る二度目に入る奴等もその記憶の持ち主と何らかの縁を持った奴に限るそうネ！あ、後ここにいる間はその記憶の持ち主の感情や気持ちを共有する事になるって説明書には書いてあったヨ！ちなみここでの時間の流れは現実の何

万分の一とかも書いていたような気がするアル！」

一同はそれを聞きここは何処なのか理解した。

そう、つまりここは坂田銀時という人間の過去なのだ。だがしばらくして近藤が一つの疑問を投げかけた。

「じゃぁなぜ俺達はこうして一緒に話したりできるんだ？俺達は万屋の記憶を見ているだけなんだろう」

その近藤の言葉を即座に返す神楽。

「それは当然ネ！何せここは銀ちゃんの精神世界、ん？記憶世界？の中のようなものネ！だから皆一緒にその世界に入り込んだ事になるアル。だから皆と会話が出来るネ」

自慢げに語る神楽。

最後に「納得したか？ゴリラ」と確認を取る。

「なるほど、そういう事か・・・・って俺ゴリラじゃないからね！？」

納得したと言った後、ゴリラと言われた事に対してツッコミを入れる近藤。

そのツッコミを無視してさらにこう続ける神楽。

「後ここは夢の中みたいなものアル。だから何でも想像すれば出てくるはずアル！」

そう言った後、酢昆布を己の手に出してみようとする神楽。

結果・・・ポンッという効果音を立ててその手には酢昆布が現れた。

それを見て土方はマヨネーズとタバコを出した。

「ホントに出た！？てか土方さん、銀さんの過去まで来てそんな物を出しますか・・・」

新八は呆れながら言った。が、当の本人には聞こえていない様だ。

今までの神楽の説明で、全ての事を理解・納得した新八・神楽・近藤・土方・沖田・山崎。

そう、ここは神楽の言うとおり、想像した物は何でも出て来る。が、お腹が空いたり眠くなったりする事はない。

そして今目の前にいる銀時の過去の住人には、自分達の姿が見えない、そして声も聞こえてはいない。

それは考えれば分かる事だ。

なぜならここは、銀時の過去の記憶であり、もう既に起こった事実なのだから。そして新八達はただその映像を見ているだけ・・・

そこまで理解した新八達。

だが、大事な事を忘れていた事に気づいた土方。

「・・・おい、肝心のヤローはいつ現れるんだ？」

それを言われた一同は「そういえば・・」と言う顔をする。

「そうねネ！肝心の銀ちゃんがいないネ」

「確かに土方さんの言う通りでさァ。旦那はまだ俺達の前に出て来てやせんねぇ」

ちょうどそんなことを言っている時、新八達がいるすぐ隣の寂れた家から、大きな怒鳴り声が聞こえた。

「この鬼っ子が、もうここから、いや、この村から出て行け！」

それと同時に頭に響く声。

（・・・・出て行け・・・・って、そんな事・・・・）

その声の主がこの世界の中心人物であることを理解した新八達は、声の聞こえた家に入ろうとする。

だが家の扉に触る事が出来なかった。

新八達はしかたなく、幽霊みたいにその扉をくぐった。

その家に入ると同時に、今までの、今に至るまでの銀時の記憶が流れ込んできた。

ある小さな家で、髪の色と瞳の色が異様な子供が生まれた。

その子の母親はその子供を初めて見たときは驚いた。

だが自分の子供である事に変わりはないので、その子をとても可愛がった。

しかし、その母親はその子を産んだ為、床に伏すことになってし

まった。

そしてその二年後の今日、病で他界してしまった。

一方その子の父親は、その子の母親とは反対に、その異様な見かけに恐れを抱き、その子供を鬼っ子と言っては拒絶した。

もちろんその子の母親、その男の「妻」の前ではそんな素振りは見せなかった。

だが村人も、その男と同じようにその子供の姿を見て恐れを抱き、「鬼っ子」と言ってはその子供の存在を否定していた。

妻の前ではその鬼っ子に優しくする素振りを見せていた男も、その事にだんだん嫌気がさしていた。

そんな時に「妻」が他界。

鬼っ子と言って拒絶する事をその男に躊躇わせていた「妻」という存在がいなくなった・・・・・・・・・・

その記憶を走馬灯のような形で見た新八達。

そして今、新八達の目の前には床に安らかに横たわる女の骸と、傍で微かに涙を浮かべている幼子・・・いや、新八達のよく知る人物の幼き姿があった。

そう、我等のよく知る銀髪、そしてその両の目は赤色という特徴。

間違いなくその幼子は銀時だ。

「鬼っ子！お前なんか消えてしまえ！」

母親の死に涙を流していた幼子（銀時）に、蹴りを入れて「妻」からその幼子を引き離そうとする男。

お腹に蹴りを入れられた三歳にも満たないその小さな体は簡単に弾け飛ぶ。

ドンッ！

「・・・ッ！？」

壁に大きな音を立てながらぶつかる。

思いっきりお腹に蹴りを入れられた時に、頭の奥の方で声が聞こえた新八。

（なんで、父さんは・・・・）

その声は今目の前で蹴り飛ばされた幼子のものだとすぐに理解する。

その声は新八だけではない、神楽や近藤、土方や沖田、山崎にも聞こえた。

男は一回蹴っただけでは気がすまなかったのだろう、壁にぶつかって呻いていた幼子の体を持ち上げると、その体に己の拳を入れる。

「ウッ・・・・グハッ！」

殴られるたびに顔を苦痛に歪ませる銀時。

十発ほど殴った男は、急にその手を離した。

その幼子はとっさの事で反応が出来ず、もろに体を地面に打ち付ける。

「ケホッケホッ」

打ち付けられたと同時に首に手を当て大きく咳き込む幼子。

その手を離した男は、そんな幼子に背を向け、壁に立てかけてあった刀のところまで行き、その刀を手に握った。

その様子を見ていた新八達は、その男が刀を握ったところで「まさかっ！？」と言う顔をした。

そして、その男の後姿を見ていた幼子の考えも頭に流れ込んできた。

（殺される・・・）

・・・怖い

・・・いやだ

そんな考えと共に、恐怖が頭の中を支配した。

幼子を見れば恐怖で顔が歪んでいる。

幼子は走り出した。

刀を持ってこちらに歩みを進めようとする男から。

家を出る瞬間、幼子は一つだけ亡き母に詫びを入れた。

（弔って上げれなくてごめん・・・・）

・・・ごめんね。何にもしてあげられなくて。

そして感謝の言葉を続けた。

（・・こんな俺を、愛してくれてありがとう・・・・）

そんな幼子の心の声を聞き、新八達は銀時に対して大きな罪悪感を抱いた。

家の扉を勢い良く開けて外に出た幼子。

だが家の外には、目頭を立てて銀時を睨む村の衆がいた。

おそらく先ほどの怒鳴り声で集まってきていたのだろう。

元々その幼子の事を恐れていた村人は、その幼子の姿を見ると同時に口を開いた。

「この村から出て行け！」

「鬼っ子！出て行け！」

「鬼っ子！」

「村から出て行け！」

次々とそんな言葉が村人から出てくる。

（ッ鬼・・・やっぱり、俺？）

そう思うと胸の辺りから何かがこみ上げてくるような感覚に襲われた。

そう、それは涙。

だが感傷に浸っている場合ではない。

幼子はそんな村人から逃げるように背を向けて走り出した。

それでも出て行けと言ったくせに、ただでは行かせないと言わんばかりに村人の一人が背を向けて逃げ出す幼子に小石を投げつける。

その小石は外れたが、それを皮切りに大量の小石が幼子に向かって飛んでいく。

走りながらも深い深い悲しみに囚われていく幼子。

（俺は、存在しているだけで駄目なの？）

そんな思いがあふれ出し、その赤い瞳からは先程一生懸命我慢をしていた涙が頬を伝い流れていった。

村の出口に向かってひたすら走っていた幼子は

「あっ！？」

と言いながら転倒した。

村人が投げてくる石がその幼子の足に当たったのだ。

だがそんな事を気にも留めず、直ぐさま立ち上がりまた走り出す。

村から出る頃には体はすっかりボロボロになり、その足取りも重くなっていた。

後ろを振り返ってみたが後を追ってくるものはいない。

その幼子安堵のため息を吐きながらその生まれ育った村を後にした。

最後に一言を残して

「母さん、さようなら」

人の過去は開いてみればパンドラの箱って事があるから気をつけろ！（後書き）

「おい作者！」

・・・はい

「お前昨日模試合ったんだろう？」

・・・はい

「どうだったんだ？」

・・・・・・

「ダメだったのか」

・・・はい・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3839y/

白銀の生き様

2011年11月10日03時08分発行